

柩守りて一夜歌なき寂寥を父に肖ぬ子はたゞ夢のこと。(父の死によめる)

唱

錦浦生

百合が香に甕はつゝめ夢の世を夕戸のやみに神むつまじき
美くしう伊勢路の夏を飾るべく戀幸のせて降りけん百合
あされどされど云ひてやまんにはあまりにあつし胸の血潮の
碧瑠璃の空をゆめ路の星もとべ人の小唄に我れ笛とりぬ
聖僧が姫に戀すと古への戯作うれしき清水や寺
薰じては几帳ゆらめく高殿の觀月の宴を人と相ひ見る

染紙に人なつかしき肥後の秋を心みだるゝ萩の葉の風
秋を侘びて蟋蟀なくと草の戸よ二年み手のやつれしよ君
永久にかへりまさじか佛のみ墓になきて不二を見し哉 (燐牛の墓にて)

俳句

紫浜吟社運座席上吟

七夕の色紙たぼろに朝の霧
水によき都なりけり星祭

歌百首汨羅に星を祭りけり

敗荷

蓑虫の垂るゝ樓や返り咲き

蛭の子が蓑虫取りで歸りけり 二坊

淡 水

星月夜擬寶珠光る五條橋も

羽率

蓑虫の身の末なげく餘命かな 淡水

李 王

星月夜奈良の都の大伽藍

李 王

雨に風に蓑虫世をは憤る 子明

淡 水

星月夜怪しき草の光かな

淡 水

蓑虫や籬に落葉はさまれる 紅鱗

李 王

星月夜牛の荷物を卸し居る

魏 坊

蓑虫や長安に住む老書生 李 王

行 秋

星月夜千里の馬を逸しけり

淡 水

薬籠の藥空しき暮の秋 李 王

晚 江

星月夜牛の荷物を卸し居る

淡 水

満柿は猿もねすまで秋暮れんこす 李 王

晚 江

星月夜怪しき草の光かな

淡 水

行く秋を門まで出でゝ眺めけり五山 李 王

行 秋

星月夜牛の荷物を卸し居る

淡 水

行く秋や須磨の泊りの雨七日 淡水

行 秋

星月夜牛の荷物を卸し居る

淡 水

星月夜五重の塔のあざやかに 矢川

星 月 夜

星月夜牛の荷物を卸し居る

淡 水

瀬をはぐむ石の白さよ秋の川

敗荷

秋の川河心に渦の細りけり

紅鱗

秋の川高雄をめぐり流れけり

敗荷

物の骨あらはに見ゆる秋の川

紫子

露

朝なく片野の原や露時雨

李王

朝朝や病後の妹の露をふむ

子明

鉄橋の欄干に露流れけり

蓮北

杵州の露皆光る月夜かな

淡水

朝晴や阿蘇の高原の露時雨

矢川

後月の月

李王

梨壺にあるさまや後の月

紫子

仁和寺の花は馬子隠れけり後の月

一坊

後の月河瀬の音が高いかな

魏坊

後の月俳諧寺の片鎮し

李王

此頃は奇病流行るよ鶴頭花

敗荷

若くして人みまかりぬ葉鶴頭

同

かくれ住む庭暖に鶴頭咲く

紅鱗

萩桔梗鶴頭は高し石燈籠

紫子

泉水の島に堂あり葉鶴頭

蓮北

鶴頭や異人の垣に秋の色

五山

西痛荷車ありて葉鶴頭

紫子

鶴頭や夕日冷き寺の庭

晚江

勅額の山門入れば鶴頭哉

蓮北

鈴虫の小塚作りぬ萩の庭

紫子

白萩の露に斧とぐ男かな

同

鹿寂し跡とや思へこぼれ萩

一坊

野分して萩寺名のみ残りけり

羽率

自孤すむ野寺が裏の萩原

李王

萩の花風いさゝかの月夜かな

淡水

君去りて君思ふ窓や萩の風

子明

萩の宿琴彈く人の美しき

晚江

菊

蛇 オコ 諺

露しへど朱益に菊のたばねかな紅鯉
観菊に菊花大授章の大臣かな 魏坊

節刀に菊をも添へて賜りぬ 一坊

よき妻を迎へて作る菊人形 同

菊活けて天長節の袴かな 晚江

君が代や大輪の菊手に持ちて 同

菊の香に冷き琵琶を抱きけり 紫子

菊の香や絹行燈に人妻若し 同

菊さげて白衣の女通りけり 同

山蓼の花葉に小狐も頬かむり 同

山蓼の花葉に小狐も頬かむり 同

蓼 錐 栗

蓼 イキ 諺

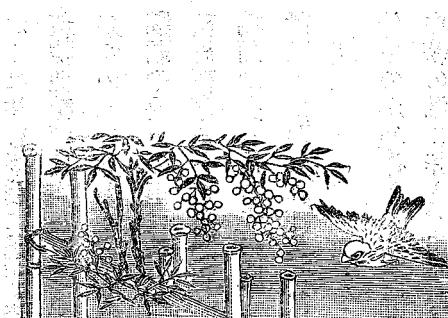
穂に出でよ赤き 山蓼の花葉に

二日月くまざれば 小狐も頬かむり

女郎花 同 諺

蝶のはねぬらしに 粟程の花こぼし

女郎花秋をすねて 露いとふ莖のふり、



長雨にぬれしうろこ葉を卷いて散る秋の穴に入る蛇の尾にくづをれな白桔梗